

JAP4110 – Classical Japanese

Autumn semester 2012

Thursday 15 November

Four (4) hours

4 pages

Dictionaries or other reference books may **NOT** be used.

1. Translate the passages from the following texts.

Text A: Taketori Monogatari

Text B: Ise Monogatari

Text C: Hôjôki

2. Analyze grammatically the passages in the texts marked by lines.

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節をくだててよごとに、黄金ある竹を見つくる事がさなりぬ。かくて翁、やうくゆたかになり行。

この児、やしなふ程に、すく／＼と大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よき程なる人に成ぬれば、髪上げなど左右して、髪上げさせ、裳着す。帳のうちよりもいささ、いつきやしなふ。この児のかたち、けうらなる事、世になく、屋のうちは、くらき所なく、光みちたり。翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬ。腹立たしきこともなくさみけり。

翁、竹を取る事久しくなりぬ。いきおひ猛の者に成にけり。この子、いと大きに成ぬれば、名を、御室戸齋部の秋田をよびて、つけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。この程三日、うちあけ遊

ぶ。よろづの遊びをぞしける。おとこはうけまらはず呼びつとて、いとかしこく遊ぶ。

世界のおのこ、貴なるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を、得てしかな、見てしかなく、をとに聞きめでせとふ。そのあたりの垣にも、家の門にも、をる人だにたはやすく見るまじき物を、夜はやすき寝も寝ず、闇の夜に出て、穴をくじり、かひ間見、まといあへり。さる時よりなむ、「よはひ」とは言ひける。

人の物ともせぬ所にまといありけども、なにの験あるべくも見えず。家の人どもに物をたに言はんとて、言ひかゝれども、ことどもせず。あたりをはなれぬ君達、夜をあかし、日をくらす、多かり。

(六 段)

むかし、おとこありけり。女のえ得ましかりけるを、年を経てよ
ばひわたりけるを、からうして盗み出でて、いと暗きに来けり。芥
川といふ河を率ていきければ、草の上^(あ)にをきたりける魔を、「かれ
は何ぞ」となんおとこに問ひける。ゆくちき多く夜もふけにければ、
鬼ある所とも知らず、神さくいとみじら鳴り、雨もいたう降りけ
れば、あばらなる蔵に、女をば奥にをし入れて、おとこ、弓胡^(か)録^(ろく)を
負ひて戸口に居り、はや夜も明けなんと思つゝゐたりけるに、鬼は
や一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさはぎにえ

聞かざりけり。やうく夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もな
し。思^(おも)ひやりをして泣けどもかひなし。

白玉^(はくぎよ)かなにぞと人の問ひし時露^(つゆ)とこたへて消えなましものを
これは、一条の后の^(い)いとこの女御の御もとに、仕^(つか)うまつるやうに
てゐたまへりけるを、か^(か)たちのいとめでたくおはしければ、盗みて
負ひて出でたりけるを、御兄^(みせ)人堀河の大臣、太郎国経の大納言、ま
だ下^(しも)らうにて内^(うち)へまいりたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけ
て、とゝめてとりかへしたまうてけり。それを、かく鬼とはいふな
りけり。まだいと若^(わか)うて、后^(きさき)のたうにおはしける時とや。

二三四町を吹きまぐる間に、こもれる家ども、大きなるも小さなるも、
一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁・柱
ばかり残れるもあり。門を吹きはなちて四五町がほかに置き、また、
垣を吹きはらひて隣と一つになせり。いはむや、家のうちの資財、
穀を盡して空にあり、檜皮・葺板のたぐひ、冬の木の葉の風に乱
(る)るが如し。塵を煙の如く吹(き)立てたれば、すべて目も見えず、
おびたくしく鳴りどよむほどに、もの言ふ聲も聞えず。かの地獄の
業の風なりとも、かばかりにこそはとぞおはゆる。家の損亡せるの
みにあらず、これを取り繕ふ間に、身を損ひ、かたはづける人、数
も知らず。この風、末の方に移りゆきて、多くの人の歎きなせり。
辻風は常に吹くものなれど、かゝる事やある、たゞ事にあらず、
さるべきもののさとしか、などを疑ひ侍りし。

また、治承四年水無月の比、にはかに都遷り侍(り)き。いと思ひ
の外なりし事なり。おほかた、この京のはじめを聞ける事は、嵯峨

の天皇の御時、都と走まりにけるより後、すでに四百余歳を経たり。
ことなるゆるなくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の
人安からず憂へあへる、実にことわりにも過ぎたり。

されど、かくいふかひなくて、帝より始め奉りて、大臣・公卿
みな悉く移ろひ給ひぬ。世に仕ふるほどの人、たれか一人ふるさと
に残りをらむ。官・位に思(ひ)をかけ、主君のかげを頼むほどの人
は、一日なりとも疾く移ろはむとはげみ、時を失ひ世に余されて期
する所なきものは、愁へながら止まり居り。軒を争ひし人のすみひ、
日を経つゝ荒れゆく。家はこぼたれて淀河に浮び、地は目のまへに
島となる。人の心みな改まりて、たゞ馬・鞍をのみ重くす。牛・車
を用する人なし。西南海の領所を願ひて、東北の庄園を好まず。

その時おのづから事の便りありて、津の國の今の京に至れり。所
のありさまを見るに、その地、程狭くて条里を割るに足らず。北は
山にそひて高く、南は海近くて下れり。